

開発途上国の子どもたちから学ぶ 「生きる力」

～ネパール・エチオピア・モロッコと繋いだ協働学習～

学校名 河内長野市立天見小学校

所在地 〒586-0062
大阪府河内長野市天見2370-1

ホームページ
アドレス <http://academic1.plala.or.jp/tihayagu/>

新しい指導要領において「ゆとり」でも「詰め込み」でもなく、「生きる力」をはぐくむ教育が強調されている。これは毎年3万人を超える自殺者をだす日本の社会問題が背景にあるのかもしれない。（自殺率世界第5位2009年WHO資料）高度経済成長期での安定した社会で、将来に大きな不安もなく生活できた時代は終わった。激しく変化する社会で生きる時代になっている。

今回の学習指導要領の基本的な考え方としても「知識基盤社会の到来や、グローバル化の進展など急速に社会が変化中、次代を担う子どもたちには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや、他者と切磋琢磨しつつ異なる文化や歴史に立脚する人々との共存を図ることなど、変化に対応する能力や資質が一層求められている」と説かれている。

今、子どもたちに求められているのは、グローバルな視点から物事を考え、急激な変化にも柔軟に対応できる能力・資質である。現実社会は変化と苦闘の連続である。しかし、残念なことに日本の学校現場は、そのような厳しさを学習できる教材に乏しい。物質的な豊かさの中で、子どもも親も甘えと我が儘が先行し、他人を思いやる心が不足しているように思う。そして卒業後、社会の厳しさに直面し、現実逃避へと向かってしまう。

そんな思いから苦しい生活環境の中でも、未来に希望を持って逞しく生きている子どもたちとの「共に学び」「共に生きる」学習プログラムを計画した。世界4分の3以上の国が開発途上にあり、その中でも特に生活環境の厳しい後発開発途上国であるネパールやエチオピアの人々との交流である。ともに近年、政変による社会の大きな変化を経験している国である。

このような国々との交流を深める中で、日本の子どもたちが様々な変化や厳しい現実の中で頑張っている人々の姿から、苦難に「負けない心」と「生きる力」を育んでほしいと授業実践に取り組んだ。

最初のプログラムは、エチオピアと繋いだ遠隔授業である。2011年6月21日午後2時45分から開始された。エチオピアでは午前8時45分である。インターネット環境が不安定なため、比較的安定しているエチオピアのJICA事務所と繋ぎ授業は行われた。講師はエチオピアの首都アジスアベバの小学校で理科教育を担当されている田中剛先



生である。この授業には本校4年生の児童たちが参加した。授業中の中では、水道やガスのない生活、さらに電気は頻繁に停電する。そんな中でお母さんが調理を行い、食事をする子どもたちの様子を写真などの資料で紹介していただいた。

またエチオピアの生活についてのクイズも用意していただき、現地での「歯磨き」を実演していただいた。エチオピアでは小さな木片で歯磨きを行うとのことである。授業に参加した子どもたちは、朝起きれば水道の水で顔を洗い歯磨きをすることが当たり前と考えていた。しかし、それは世界の中では当たり前ではないことを学んだ。

翌日の6月22日には、モロッコとつないだ遠隔授業を行った。日本時間は午前9時45分からのスタートである。モロッコでは深夜の1時45分である。講師はJICA現職派遣教員としてモロッコで体育指導されている札幌計江先生で



ある。札幌先生は同じ河内長野市内の長野中学校で体育教員として勤務されていて、平成10年にJICAからモロッコの学校へ派遣された。参加した本校児童6年生にとっても馴染みのある先生である。札幌先生は時差の関係で、モロッコの子どもたちとの直接的な交流が困難なため、この授業のためにわざわざモロッコの学校でビデオを撮って、子どもたちのメッセージを伝えていただいた。しかもアラビア語でのメッセージに日本語の字幕までつけていただき日本の子どもたちが分かりやすいように配慮していただいた。本当にありがたいことである。札幌先生のご苦勞と誠意に本校児童も教員も深く感銘を受けた。ビデオの中ではモロッコの小学生で学ぶ女の子と男の子が将来の夢を語り、学校での楽しい生活を紹介してくれた。また札幌先生から体育の授業がなく、体力面であまり鍛えられていないことや、学校にはボールや鉄棒などの器具もないことを教えていただいた。また学校の校庭やグラウンドも整備されておらず、先生や生徒たちの力で少しずつ整えられていることを教えていただいた。そのときの先生や生徒たちの作業の様子を撮った写真を見ながら、日本の子どもの中から「ありえへん」という声が聞こえてきた。さらにある部屋の写真を見せていただき、「この部屋は何をする部屋か分かりますか」との札幌先生の質問に、子どもたちは「更衣室」「会議室」等の声が上がった。答えは「図書室」との話に子どもたちは怪訝そうな顔をした。なぜならその写真には本が一冊もなかったからである。聞けば予算の関係で本を買うことができないとのこと。本のない図書室、ボールのない倉庫など日本では考えられない現実を子どもたちは学ぶことができた。

続いてこの6月22日の午後1時45分からは、ネパールのカトマンズにあるビジェーショリー・ギャン・マンディール小学校との交流授業を行った。ネパールでは午前10時過ぎである。この交流授業に参加したのは本校6年生である。交流は簡単な英語でお互いの自己紹介から始まり、そのあと質問を相互に投げかけた。その対話の中からネパールと日本での生活についての情報を交換した。ネパールの電力事情や学校での厳格な生活について日本の子どもたちは驚いていた。



日本では、先生や両親に対して言いたいことを言い、我が儘を平気で通そうとするが、そんなことはとても許されない国が多いことを本校児童は知った。それと驚かされたのはネパールの児童たちの流暢な英語で

ある。自分たちよりもけして恵まれた環境とはいえない、ネパールの同世代の人たちが、自分たちよりもはるかに優れた英語でのコミュニケーションの力があることを知ってショックをうけていた。夜は電気がなく灯りも満足にない中で学ぶ子どもたちに、語学の力は完全に負けている事を認識させられた。オーストラリアの交流校のように母語が英語であれば自分たちの語学力がどの程度かは、あまり気にならなかつたろう。しかしネパールの友だちの母語は英語ではない。この同世代での異文化交流授業では、参加した子どもたちにとって感じるものが大きかつたようである。

2学期に入り、9月14日にオーストラリアのメルボルン近郊にあるセントポール校トララルゴンキャンパスの4年生と本校6年生徒の語学協働学習が行われた。これは互いに外国語を学ぶための手段として、互いの外国語で自己紹介をしたり、質問をしたりゲームをする交流授業である。

オーストラリアとは時差も少なく、日本語を学ぶ学校も多いことからこのようなプログラムが昨年度から本校では行われている。その交流授業を担当しているネパール人英会話教師の提案により、オーストラリア・ネパール・日本の3カ国での音楽交流会を行うことを計画することにした。

当初、このような交流プログラムは予定になかつた。しかし、前回のネパールとの交流授業では通訳や説明の時間が多く必要となり、ごくわずかの児童達だけの対話交流に終わってしまった。そのため折角、代表に選ばれ参加したネパールの子も達にとって、内容的に十分に満足できるものではなかつたとの話があつた。そこで、音楽での交流であれば全員参加が可能だということで、11月16日に「3カ国音楽交流会」を行うことになった。お互いの国の音楽を知ることは、その国の文化を知る上で意味がある。そんな意味からもネパール人先生の提案を受けることとなつた。この交流授業には本校の5、6年生が参加した。ネパールからは民族衣装を身に付けた児童達が美しい音楽に合わせて華麗な踊りを披露してくれた。オーストラリアからはリコーダーで美しいメロディーを奏でてくれた。日本も同じようにリコ



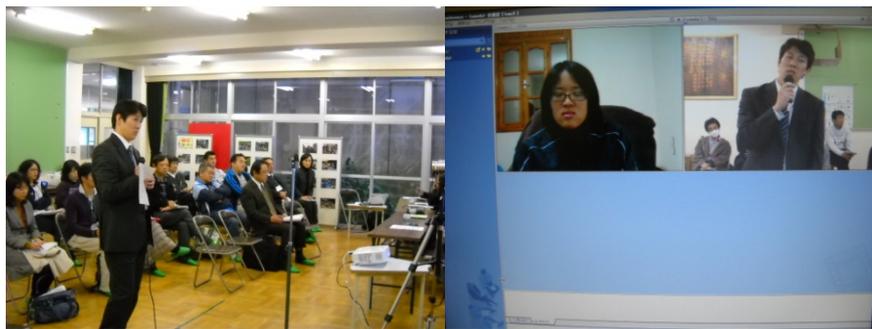
ーダーでの演奏を行った。とても楽しい盛り上がりのあつた音楽交流会になつた。終了後、さよならの挨拶はいつまでも続き、画面いっぱい3カ国の子どもたちの嬉しそうな顔が広がつた。「音楽は世界を結ぶ芸術」そんな思いを痛感させられた。ただ反省させられたのは、日本らしい音楽を発表できればもっとよかつたということである。

続いて11月30日には、エチオピアと繋いだ遠隔・交流授業が行われた。今回は遠隔授業としての講師はJICAから派遣されている荻野玲子先生です。荻野先生はメネリク第2小学校で理科教育を担当されている。今回の授業では、わざわざ、このメネリク第2小学校からは2名の7年生の生徒と教頭先生が参加していただいた。日本では午後2時からのスタートだが、エチオピア時間では午前8時である。この3名の方は、まだ学校の始

業前にJICA事務所まで来ていただき、この授業に参加していただき、交流していただくことになった。この遠隔・交流授業はJICA事務所の方々や荻野先生・メネリク第2小学校の校長先生等の方々のご支援ご協力により実現した。皆様方のご協力に深く感謝する次第である。今回の研究の一つの狙いとして、直接的に開発途上にある国の子どもたちとの交流がある。その意味で、本当にありがたいと思った。授業の中で、互いの生活についての情報交換や上来の夢について語りあった。2名のエチオピアの生徒は小学校7年生、日本でいうとおそらく中学校1年生にあたる年齢だろう。そのせいもあってか、とてもしっかりと話をしてくれた。「将来の夢に向かって今は、しっかり勉強している」「機会があれば日本に是非行ってみたい」など前向きな姿勢を強く感じる事ができた。



尚、この授業は大阪府の南河内地区の先生方で組織されている地区教育研究会・視聴覚教育部の本年度の研究発表の公開授業として行われた。参加された地区の先生方は50名近くおられた。参加された先生方はこの



のような授業にとっても興味を示されていた。この公開授業終了後は、早朝のモロッコと繋ぎ札幌先生から研究会に参加された先生方に「遠隔授業の可能性」について話していただいた。質問時間では「アラブの春」な

どと言われている状況について、モロッコの現状から観て札幌先生自身の考えを聞かせていただいた。とても有意義な研究集会となった。

12月15日には今度はモロッコの子どもたちとの直接的な交流授業を札幌先生に計画していただいた。モロッコの学校に合わせるために日本の学校でのスタート時間は午後5時30分となった。課外時間であるために希望者を募り、保護者と同伴での参加をお願いした。モロッコでの開始時間は朝の8時30分である。参加していただいたのはカトマンズにあるムアヒディン小学校である。

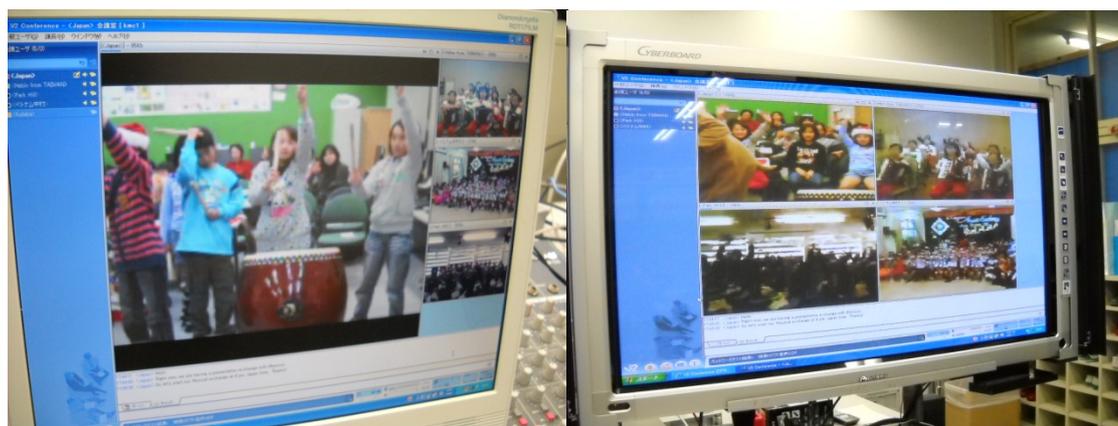
交流授業の中では、互いの学校紹介や参加児童の代表挨拶や質問会を予定していた。しかし計画途中でムア



ヒディン小学校の校長先生からの提案を受けて小学校紹介だけでなくインズガン市、モロッコの紹介などほしたいということになった。そんなわけで、さまざまな資料を用意していただき交流授業を開始した。残念なことは、通訳を入れると時間が倍以上になるということを互いに十分認識できていなかったことである。交流授業の時間は大幅に遅れ、全てを消化することができなかった。しかし、モロッコの子どもたちの熱意と校長先生の誠意は、強く感じられた交流授業だった。

本校校長から最後にお礼の言葉をモロッコの校長先生に述べていただいた。

実は、その当日午後6時からイギリス・台湾・ベトナムの学校との音楽交流会も予定されていてモロッコの学校も一緒に参加していただいた。そんなわけで、とても時間的に厳しい状況だった。これも日本の学校では、夕刻に子どもたちを集めて授業を行うことは、安全面などの懸念からめったにできないからである。時差の問題があるので、ヨーロッパやアフリカの学校との学校間での交流授業はこんな機会にしかできない。



そのチャンスを生かし、同じ日に多くの国との音楽交流授業も計画した。ここでは、前回の音楽発表会の反省を踏まえ和太鼓の演奏を披露した。この和太鼓は今回の助成を調整して準備させていただいた。世界の子どもたちは日本の児童の和太鼓の演奏に大きな拍手を送ってくれた。

この1年間、拙い取り組みではあるが本校児童が世界の開発途上にある国々と交流できたことは大きな意味があった。日本で暮らす児童の日常生活とそのような国々で生きる子どもたちとは、明らかに「今を生きる」ことへの意識が違う。物が「あって当たり前」の生活と「なくて当たり前」の暮らしとは大きな違いがある。しかし、「なくて当たり前」で生きる子どもたちからは、両親や先生に対する感謝の心や苦しさに対する耐性を強く感じられた。さらに未来への夢や希望が声の響きや顔の表情にはっきりと表れている。このような事実を本校児童と教員と一緒に体感できたことは大きな成果だと考えている。

またインターネットを利用した交流授業や遠隔授業のプログラムのたて方についても良い勉強ができた。当初予定していた、メールや郵便での個々の交流は、開発途上にある学校では、困難であることが分かった。児童生徒の人数の違い、学校でのインターネット環境の違い、パソコンを利用できる環境など日本と同じように考えてはいけない。また郵便物の交換についても互いの国々の郵便事情の違いなど考慮すべきであった。エチオピアのJICA職員の方からそのようなご指導をいただき計画の甘さを認識させられた。

ただそのような中で、音楽によるインターネット交流が大変有効な交流手段であることが分かった。楽しく全員が参加でき、互いの文化について認め合うことのできる素晴らしいプログラムだと感じた。来年度以降も、定期的な交流を継続し、本校での年中行事として国際音楽交流授業を位置づけたいと考えている。和太鼓の腕もしっかりと磨きながら……。